

risei + trip

vol.
05



特集

アスレティック
トレーナーになろう！

特集

アスレティック トレーナーになろう！

「将来はアスレティックトレーナーになって、アスリートを支えたい」
どんなスポーツ現場でも頼りにされる「その職業」を目指して、
履正社の学生たちは日々、様々なフィールドで現場実習に挑んでいる。
この夏、ラグビーの“聖地”菅平高原で行われた実習の様子が迫った。



photographs by Kensuke Tamura



(写真右)試合中に選手のテーピングの状態を確認する脇田君(左上)トレーナーの必需品が詰まったバッグ(左下)プレー中に足を痛めたおれ込んだ選手に狩野先生が駆け寄る瞬間

8月初旬、長野県の菅平高原へ向かった。標高約1300mの緑豊かな町には、1000面もの芝のグラウンドが広がっている。車の窓を開けると、大阪の酷暑を忘れるほどの涼風が吹き抜けてきた。
真夏でも、平均気温は19℃。毎年40万人近くのラグビー部員が集う夏合宿のメッカ(聖地)として知られるというもうなずけた。この日も、日本中から集まったラグビー部が、町じゅうのいたる所で真剣勝負を繰り広げていた。

ここで、履正社医療スポーツ専門学校の学生たちがトレーナーとしての実習経験を積んでいる。プロのトレーナーから、現場でしか学べない知識や技術を得るためだ。彼らがめざしているのは、アスレティックトレーナー。競技スポーツのチームには不可欠の、なくてはならない存在だ。

選手生命に関わる仕事。

スポーツ現場で、アスレティックトレーナーはどんな役割を担っているのだろうか。ラグビーのプロチームやナショナルチームにたずさわった経験を持つ本校教員の狩野祐司が、解説してくれた。

「選手がケガをした場合は、ケガの程度を評価し、応急処置を施します。早期復帰に向けたリハビリ指導や、ケガ予防・競技力向上のためのトレーニング指導、選手の健康管理なども大事な役割です」

狩野がチームトレーナーを務める全国レベルの高校ラグビー部も、こ菅平で合宿を行っていた。狩野を見ると、監督やコーチなどやり取りを重ねながら、グラウンドの隅から隅まで動き回って部員たちの指導にあたる。

そんな先生の動きを実際に見て、履正社の学生たちは多くのことを学んでいる。ある学生が言う。

「部員が100人以上いる中で、一人一人を個別にしっかりと見ているところがすごい。テーピングを巻く時もめっちゃ早くて、圧巻です」

高校生でも、ラガーマンの体重は平均80kgを超える。全力でタックルするスピードと迫力はすごい。ケガもつきもので、救急車を呼ぶ場合もある。

脇田涼平君が試合のサポートについていた時も、選手が倒れた。痛みを訴える選手に触診と評価を行い、どの部分に痛みが出ているのかを確認した。先生の評価とも合ったそうだ。瞬時の判断を誤れば選手生命にも関わるため、責任は重い。「落ち着いて対応できました」と安堵の表情を見せていた。

脇田君は高校生の頃、サッカー強豪校でプロをめざしていたが、ケガで夢が叶わなかった。トレーナーを志したのは高校2年生の頃。履正社を選んだのは、2年間で卒業でき、少人数制で現場実習に行けるからだ。専門学校で履正社高校の運動部をはじめとする多くの現場を経験し、早く社会に出て認められたかったのだという。

関西No.1の現役合格者数。

履正社は、文科省傘下の日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー(JSPOART)の理論試験で関西No.1の現役合格者数を出した(当校調べ)。狩野のように、日本代表やプロチームでのトレーナー経験がある教員が、万全の体制でサポートを行っている。

JSPOARTは現在、日本代表やプロチームの採用条件になるほど、保有の必要性が高い資格である。来年はラグビーW杯、再来年は東京五輪と、日本で国際大会が続く。いつかそんな大舞台で選手を支えるため、学生たちは今日も経験を積む。